経済史研究に新世代

Japan's industrialization in the world economy 1859—1899

杉山　伸也著

(The Athlone Press　37.50ポンド)

杉山氏の今回の受賞作は、十九世紀後半における日本の産業化を国際経済の動きの中で見直し、とくに日本の離陸を支えた輸出産業の生糸、茶、石炭について綿密な記述を与えたものである。

記述は明快で、論議は鋭いがけない刺激に富み、経済史研究の新世代の登場を告げ知らせる魅力をもつ。ロンドン大学へ提出の学位論文に基づいて書かれているが、一般読者にも英語の壁に挑戦して一読することを勧めたい好著である。

かつて日本の産業化の説明モデルとしては、欧米列強の圧力が明治維新という政治変革を余儀なくさせ、徳川時代とは不連続な新しい社会が政府主導の下で作られていったとする議論が有力だった。

杉山氏は、マルクス主義理論、「自由貿易帝国主義」の理論、発展理論などをその例を見出し、政治要因中心論、受動的反応説、不連続説としてこの種のモデルを批判する。もっとも日本国内の経済分析の面では、既に日本の数量経済史家の努力によってこれらのモデルに対する批判がほぼ定着している。

すなわち、徳川時代においてもすでに、農村工業や商業・金融の仕組みを中心として国内に産業化が胎動しており、経済的には徳川社会は明治以降の社会を用意していたという並説が示されてきた。

杉山氏はこの議論の線に沿いながら、しかし国際的な視点に欠ける点があったとして、批判を進めようとする。たとえば、一八六〇年代以降のイギリスは政府支出の削減に努めており、そのチャイナスクワドロン(支那艦隊艦隊)は条約港における英国の権益を守るのに精一杯で、東アジアの植民地化に乗り出す余裕などなかった。

薩摩や長州藩の作り出した日本植民地化の脅威は実は幻であった。実際に事態を変えたのは、むしろ一八五九年の開国以降、日本に押し寄せた世界市場の力であり、一八六八年の「明治維新」よりもむしろ一八五九年の開国に注目すべきだ。このように論じる杉山氏の指摘は鋭い。

このことを裏付けるために、杉山氏は、生糸、茶、石炭の三つの産業が驚くほど短期間にそしてダイナミックに輸出に成功したという事実を綿密に説明してみせる。ジャーデン・マティソン社内部の通信文書、外国領事の報告、当時の新聞記事を駆使する説明は、読者を魅了する。

当時のいわゆる「不平等条約」がかえって外国商社の国内進出への非関税障壁となったという指摘も面白い。日本の生産者たちが市場に対して精力的にそして時に驚かに反応する有り様、国外需要が、蚕の病気、飲料水好の変化、蒸気船の登場によって変化していく姿が描かれ、歴史的幸運の働きもそこに暗示される。

この本では、古き良き歴史学の手法に基づく個別産業の分析が、大胆な仮説の提示と結びつき、日本側の問題点も冷静に描かれる。外国で十分に学び、もはや肩肘（ひじ）を張らずに自国の過去を語れる世代の歴史家がついに登場してきたのであろう。この気鋭の筆者には、輸入代替産業との関連、二十世紀との繋（つな）がりなどを含む次の大きな著作を是非期待したい。

（村上　泰亮）

すぎやま　しんや　昭和17年早大政治経済学部卒。51年同大学院経済学研究科修士課程修了、52年ロンドン大学より博士号取得。ロンドン・スクール・オブ・エコノミックス専任研究員などを経て53年慶応大経済学部助教授。昭和24年静岡県生まれ。